

豊後高田の仏像巡りの旅



国指定・木造阿弥陀如来立像
(鬼会の里歴史資料館)

平成26年8月27日(水)

豊後高田市教育委員会

(1) 本日の行程

09:15 豊後高田市役所高田庁舎東側駐車場 集合、受付

09:30 バスで出発、応暦寺へ。

10:00 応暦寺着。住職及び担当からの説明、見学。

- ・不動明王坐像(県指定):平安後期
- ・千手観音立像(市指定):鎌倉時代
- ・阿弥陀如来坐像(市指定):室町時代
- ・不動明王立像(市指定):鎌倉時代
- ・燈明石像(市指定):室町時代

10:40 応暦寺発。

10:50 無動寺着。住職及び担当からの説明、見学。

- ・薬師如来坐像及び十二神将(県指定):平安後期
- ・薬師如来坐像(県指定):平安後期
- ・大日如来坐像(県指定):平安後期
- ・不動明王坐像(県指定):平安後期
- ・日光月光菩薩像(市指定):室町時代

11:30 無動寺発。

12:00 昼食・休憩(鬼会の里)

13:00 鬼会の里・天念寺。住職及び担当からの解説、見学。

- ・木造阿弥陀如来立像(国指定):平安末期
- ・木造勢至菩薩立像(県指定):平安末期
- ・木造釈迦如来坐像(県指定):平安末期
- ・木造吉祥天立像(県指定):平安末期
- ・木造日光月光菩薩立像(県指定):平安末期

14:00 鬼会の里発。

14:15 長安寺着。

- ・木造太郎天像及び二童子立像(国指定):平安末期

14:55 長安寺発。

15:25 円福寺着。住職及び担当からの説明、見学。

- ・木造大応国師坐像(県指定):鎌倉末期~南北朝

15:55 円福寺発。豊後高田市役所高田庁舎へ

16:00 帰着、解散

(2) 仏像巡りの基礎知識

仏像の世界は、その種類から大きく4つに分けられます。

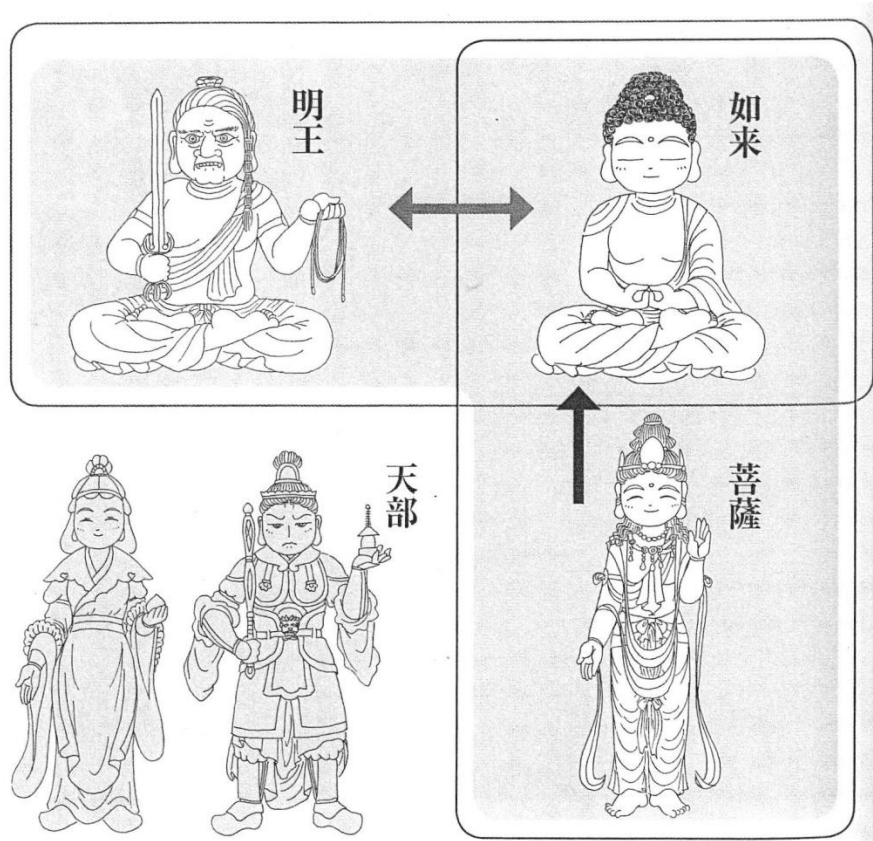


図1：仏像の世界の4つのグループ

【出典】清水真澄著『よくわかる仏像のすべて』講談社(2009)p30

- 如来…悟りを開いた人。真理の体現者として人々を導く役割。
- 菩薩…悟りの世界と、人間世界のかけ橋のような役割。
- 明王…如来が怖い姿に変化。良くないものを良い方へ導く役割。
- 天部…仏様の世界を守る役割。

「如来」の特徴

- 紀元前5世紀頃のインドに「釈迦族」という貴族の王子様として生まれたゴータマ・シッダルタは、厳しい修行の末に悟りを開いて如来となりました。
⇒釈迦如来
- その後、阿弥陀如来、薬師如来など様々な如来が考えだされました。
- 釈迦が悟りを開くと、長い修行の間に伸びた髪の毛は一本一本がくるくると丸まって、パンチパーマみたいになりました。
⇒螺髪(らほつ)
- 頭の上には大きなこぶが盛り上がりました。
⇒肉髻(につけい)
- 額の真ん中には白い毛が伸びて、それもくるくると丸まりました。
⇒白毫相(びやくごうそう)
- 大きな布の「衲衣(のうえ)」を左の胸から背中にまわし、体を一回りさせて、最後に布の端を左の肩越しに背中にかけています。
- (大日如来など一部例外を除き)冠やアクセサリーを付けません。悟りを開いているので、冠をかぶることや飾ることを超越しているからです。
- 大日如来は密教(=仏教と古代インドのヒンドゥー教の教えが融合)における最高の存在とされた如来です。菩薩、明王、天部はすべて大日如来の化身と考えられています。



○木造阿弥陀如来立像(国指定)：平安末期(鬼会の里歴史資料館)

諸事情により県外に流出していた天念寺の旧仏。平成9年に無事里帰りを果たしました。像高は198cmで比較的大型で、樫材の一木造からなります。大粒の螺髪、張りの強い面部の肉取り、大腿部のY字状の衣文などに平安前期の一木彫成像の名残を見せながら、国東仏らしい穏やかな表情をしています。

「菩薩」の特徴

- 菩薩の姿は悟りを開く前の釈迦がモデルとされています。だから、古代インドの貴族の格好をしています。
- 多くの如来が考えだされると、それを目指して修行する菩薩も弥勒菩薩、観音菩薩、文殊菩薩、普賢菩薩など様々な種類が考えられました。
 - ⇒特に弥勒菩薩は、次に悟りを開いて如来となる菩薩と決められています。
 - ⇒観音菩薩は特に人気があり、様々な種類が考えられました。
- 髪を長く伸ばして、それを頭の上で結びあげています。
 - ⇒宝髻(ほうけい)
- 下半身には巻きスカート(⇒裙(くん))をはき、上半身は左肩から右脇腹にかけて幅の狭い布(⇒条帛(じょうはく))を着け、両肩からは羽衣のような長い布(⇒天衣(てんね))を、足元近くまで垂らしています。
- (貴族の格好なので…)冠、首飾りなどの豪華な装飾品をたくさん身につけています。ただし、地藏菩薩は頭を丸めたお坊さんの格好をしています。
- 二体の菩薩を、将来なる如来の両脇に並べた三体セットの仏像を「三尊像」といいます。例えば…
 - ⇒釈迦如来の両脇 普賢菩薩と文殊菩薩 = 釈迦三尊
 - ⇒薬師如来の両脇 日光菩薩と月光菩薩 = 薬師三尊
 - ⇒阿弥陀如来の両脇 観音菩薩と勢至菩薩 = 阿弥陀三尊



○千手観音立像 (市指定) : 鎌倉時代 (応暦寺)

総高 1.88m、像高 1.53m。六郷山寺院の中では大きく古い尊形です。桧材と思われる、寄木造。ちなみに、千手観音の手は 42 本しかありません。1 本の手が 25 の世界の人々を救うとされ、40 本の手があれば $40 \times 25 = 1,000$ の世界の人々を救うということになります。これに、もともとある 2 本の手と一緒に数えて 42 本の手になります。

「明王」の特徴

- 明王の「明」は知恵をつかさどる光明のことで、密教では知恵や真実を表す呪文の意味でもあります。
- 如来が普通的手段では導けないような者に、強く怒りを持って救いの道を教えるために姿を変えたものです。
 - ⇒大日如来の化身
- したがって、明王の特徴は目をむいて怒りに満ちた表情(忿怒相(ふんぬそう))で、バックに炎をかたどった火焰後背があります。
- 着ているものは、おおむね菩薩と一緒ですが、天衣のようなひらひらとしたものは身につけていません。宝剣や弓矢などの武器、さらに装身具を身につけています。複数の顔や手足を持つ(⇒多面多臂(ためんたひ))姿をとるものが多いです。
- 明王の中でも代表的なものが「不動明王」です。



○不動明王坐像 (県指定) : 平安時代後期 (無動寺)

「黒土不動尊」としても著名な無動寺の御本尊。像高 1.16m。像容、表現など中央作風を濃く受けた平安後期の佳作で、国東半島一帯の不動明王のなかでは最も大きく、完形の尊容です。榿材の一木造。

本像の髪型は左側に梳いた総髪で、左肩におさげ髪のように弁髪(べんぱつ)として束ね垂らしています。左目は閉じて、右目は開いているいわゆる「天地眼」で、右の下歯で上唇を、左の上歯で下唇を噛んでいます。(巻髪の髪型や、両目を見開いているタイプもあります) 右手には知恵の象徴である剣を、左手には羂索(けんさく)と呼ばれる縄を持っています。また、脇侍(きょうじ=不動明王の子分)として矜羯羅童子(右)と制吒迦童子(左)が従っています。矜羯羅は優しい子供でのんびりとした顔や姿に、制吒迦は強い子供で、元気のいい姿に表わされています。

「天部」の特徴

○もともとインドの神やヒンドゥー教の神が仏教に取り入れられて、主として仏法を守る役目をしている仏たちを指します。

⇒要するにいろいろな神様の寄せ集めなので、姿形や役割は様々です。名前も「〇〇天」というように、「天」がつくものばかりでもありません。

○代表的なものとして…。

四天王…四方(東西南北)を守護します。

持国天(東)・広目天(西)・増長天(南)・多聞天(北)



※毘沙門天…多聞天の別称。独立して祀られると毘沙門天。

十二神将…薬師如来専属の「ガードマン」であり、セットで安置されています。十二支と組み合わせられることが多いです。

金剛力士…お寺の門の両側に阿吽の口で立っています。忿怒相と金剛杵によって悪を退散させ、仏法を守護します。煩惱を粉碎します。

○他にも「女性の天」として、吉祥天・弁才天などがいて、皇帝がいた時代の中国の、宮廷につかえる女性の服装をしています。



○木造吉祥天立像（県指定）：平安時代末期（天念寺）

像高 109.1cm。榿材。平安前期以来の一木彫成像の伝統的技法を守りながら、様式的には和様彫刻の浅彫りで温雅な作風を示し、12世紀の六郷山仏師工房のあり方を伝えています。

吉祥天はインド神話の「ラクシュミー」に由来し、福德をつかさどります。仏教では毘沙門天の妃とされています。

読み方は「きっしょうてん」「きちじょうてん」。

本日巡るお寺の紹介

応暦寺



鎌倉時代には「大岩屋」と呼ばれた六郷満山寺院。お寺の敷地が、縦に非常に長いという特徴を持っています。本堂に入れば県指定の不動明王坐像や国東の文化が凝縮されたユニークな仏像たちが迎えてくれます。

無動寺



鎌倉時代には「小岩屋」と呼ばれた六郷満山寺院。江戸時代に1500mほど上へと移動してきました。本堂の厳かな空間の中に、県指定の平安仏や鎌倉仏がズラリと並んでいます。

天念寺



言わずと知れた修正鬼会の舞台「長岩屋」天念寺。鬼会の里歴史資料館に安置される国指定の阿弥陀如来立像をはじめ、多くの名仏が残されています。ポスターの表紙・しおりの表紙の仏像は両方天念寺にありますので、探してみてください。

長安寺



中世六郷満山の頂点に位置した長安寺には、国東半島の独特な信仰を示す太郎天像や銅版法華経が残されています。古くは鎌倉幕府の祈願所として栄え、都甲氏や吉弘氏といった武士との関係も深い歴史的な寺院です。

円福寺



蘭溪道隆らに学んだ高僧大応国師によって開かれた臨済宗のお寺。円福寺には県指定の大応国師の頂相が残っており、修理の際に頭の中から御経や寺の由来を示す古文書が発見されました。